

## 1. はじめに

小論起筆の動機となり根底にある問題意識は、次の2点である。

パニッツイ (Panizzi, Anthony, 1797-1879) 以前の英米目録史とその周辺に関して、わが図書館界には筆者が知る範囲で、原典に即した通史<sup>1)</sup>と、図書館を社会環境との相互作用のなかで把握することを意図する論文とがあり<sup>2-3)</sup>、それらはともに優れた成果である。だが、便覧や概説の次元では、しばしばこの期間が無視されていたり、辛うじて関係記事が巻末の包括的な年表のなかに散在したりする状態にあり、紋切り型のように直ちにパニッツイから書き起こされることが多い。確かに大図書館の目録規則が成文化され公開され、さらに広域に適用される目録規則の出現を促したことの意義は計り知れない。だが、これは極言すれば畢竟、外面的な事象である。この遙か遠い以前から目録の構築は個々の図書館で絶え間なく遂行されていたのである。パニッツイ以前の歴史を捨象することは、彼の業績の正当な位置づけを妨げ、妥当でない評価が定着する原因となりはしないか。それを吟味し是正するには、彼と彼以前との目録法の連続と断絶を明らかにする必要がある。

次に、筆者は長年、以下の点を主張して来た。即ち目録作業においては、第一に、高い比率で存在する、複数著作の各体現形から成る資料に関して、個々の体現形を完全に切り出して分出記入を作成し、第二に、その結果得られた記述群を標目、特に統一タイトルによって徹底的に集中する、とのダイナミズムが、核心に存在しなければならない、ということである<sup>4)</sup>。つづめて言えば分出機能と集中機能の実現である。ここに筆者は「複数著作の各体現形から成る資料」を、合綴書(『日本目録規則』1965年版)、合集(『英米目録規則』第2版日本語版)、編者の指揮のもとに作成された著作(同)、著作の集合(次期『日本目録規則』全体条文案)等の総称として用い、分出機能を識別機能の一種と位置付ける。

我が国の図書館界では分出記入の作成はおろか内容細目の記録さえ低調で<sup>5)</sup>、統一タイトルも音楽作品を除けば無著者名古典に限られているが、海外では昨2016年にFRBR Library Reference Model (FRBR-LRM)草案<sup>6)</sup>に集合的実体 (aggregate) に関する三つの類型が提示され、またこれより先、RDAが典拠コントロールの対象を全著作のタイトルへ拡張した。これらはともにダイナミズム強化へ向かう現状打破の動向であり、日本もいつまでも圏外にいられない。この分出機能と集中機能の規定化および実践の消長に着目して英米目録史を描けないだろうか<sup>7)</sup>。

以上の二つの意識に基づいて過去の様々な時代や対象を取り上げる作業を重ね、いずれそれらの点と点をつないで線を描けばとの思いに発して、今回は手始めにパニッツイ登場以前の蔵書目録より、複数著作の各体現形から成る資料のうちの合綴書に関して、分出機能の実現に注力した二つのものを取り上げる。なお、筆者が探索した限り両目録のどちらに

についても、その関係者達が「合綴書」と「分出機能」に対応する用語を使用した痕跡を発見できなかったため、両語をそのまま遡及させて流用する。

## 2. 聖マーチン修道院 (St. Martin's Priory) の蔵書目録

数多い西欧中世修道院の蔵書目録中、標記の目録ほどユニークなものがほかにあるとは考えられない。しかもその特異さが、内容細目の記録やそれを対象とする索引にある点で、筆者には看過できない存在である。本修道院はかつて英国ドーヴァーに存在し、目録の成立年は1389年で、John Whytefeld という編纂者の姓名まで判明している。ただし、筆者は当目録の原本はおろか複製版（存在するとすれば）も閲覧していないことをお断りする。

さて、この目録の内容に入る前に、中世の写本の形態についてある予備知識が必要である。それは次の事実である。

中世写本書物の多くは、幾つかの著作の写本を、同一主題、あるいは、同一著者の下に適宜集め、合綴して1冊にまとめられている。(中略) 聖マーチン修道院の目録を調べてみると、合計450冊の写本書物がリストされている。そしてその写本書物に合本されている写本の個数は全部で1636である。(中略) 聖マーチン修道院所蔵写本書物には、平均して約4件の写本が合本されており、1写本書物当たり約127リーフ、1写本当たり約35リーフであった<sup>8)</sup>。

当目録本体は以下の3部分から構成されている。即ち、第1部の書架目録、第2部の内容細目、第3部の索引である。この構成について、ある簡潔な説明<sup>9)</sup>と、原資料<sup>10)</sup>の画像を添えた詳細な解説<sup>11)</sup>とに基づき、前者に挙げられた特定の事例に即して述べる。それは *Biblia scholarium* というタイトルの写本に、それぞれ *Questiones super quartum sententiarum*、*Concordancie breues* と題する2写本が合綴された例である。

当資料はまず第1部では、「A II」というグループの中に次のように記録されている。

### 1 *Biblia scholarium* (中略) 415 3

ここでAは聖書とその注釈という部門(蔵書全体で9部門(分類))を意味し、IIはその2段目の書架を表わす。そして、次行冒頭の1と併せて当資料がAに割り当てられた書架の2段目の、左から1番目に排架されていることを示す。また415は当資料全体のリーフ数(*summa foliorum*)を、3は合綴された写本数(*numerus contentorum*)を示す。

次いで第2部には、同一資料が同じく「A II」の中に次のように記録されている。

*Biblia scholarium* (後略)

*Questiones super quartum sententiarum* 364 a (後略)

*Concordancie breues* 373 b (後略)

これはまさしく内容細目であって、数字は各々の最初のリーフ番号を、アルファベットはそのリーフの表裏の別を表す。

最後に第3部には、中間の写本だけを取り上げると、次のように記録されている。

Questiones super quartum sententiarum A 2 1 364 a

英数字は、排架位置とテキスト開始位置の組み合わせに他ならない。

Whytefeld なる人物によるこの精巧な編成は、六百年以上も前の英国という大きな時空の差を飛び越えて、我々の心を動かす。

なお、ある論者は第3部索引を書名索引であると断定するが<sup>12)</sup>、これは彼だけである。肝心の本目録の序文（この部分のみ英訳がある<sup>13)</sup>）を読んでも判然としない。著者名やそれを伴う書名など数種類を索引語として適宜使用しているという見解<sup>14)</sup>が正しいのだろうか。なお、以上の3部構成の本体に著者索引まで付されている。

この画期的な目録が後世に全く影響を与えなかったとは思いたくないが、以後の蔵書目録の少なくとも主流とならなかったことは次章で明らかになる。

ちなみに、わが国では目録外であるが合集の背に、収録された複数体现形のタイトルを書き出す作業を、再三提唱し実践する人がいたことを特記しておきたい<sup>15)</sup>。彼曰く、「[...]川端康成の『愛』と言う書名の短編集から『伊豆の踊子』をさがし出せるような利用者はめったにいるものでない<sup>16)</sup>。」

### 3. ボドリー図書館蔵書目録

オックスフォード大学のボドリー図書館 (Bodleian Library) は、17世紀初頭から数世紀間に、数次にわたって冊子体蔵書目録を刊行し続け、その影響は植民地時代以降の米国にまで及んだ<sup>17)</sup>。多くは各々が独自の書名をもつが、本稿では便宜上あたかも全体が「ボドリー図書館蔵書目録」(もとより筆者による仮称) という一著作であり、数次の目録がその各版であるかのように述べる。それらの出版年は1605、1620、1674、1738、1843年等の順で、さらに一部の版には予備版(手稿)と称すべきものが先行することもあった<sup>18)</sup>。

#### 3.1 ボドリーが目録に求めた要件

図書館の名称にその名が冠されたボドリー (Bodley, Thomas, 1545–1613) は、当時荒廃に帰していた同館の再生を目指して「プロテスタント主義に基づいた反ローマ・カトリック的な新たな大学図書館を構想し<sup>19)</sup>」、それに基づく蔵書構築を自ら陣頭指揮した。その活動の一つが書籍買い付けである。それに当たって重複調査に蔵書目録(1605年版の草稿に当たると見られる)を使用し、目録が果たして調査の道具たり得るか否かを自ずと検証する立場にあった。

その際、彼は館長であり1605年版と1620年版の編纂者になったジェームズ (James, Thomas, c. 1573–1629) へ宛てて、自らが使用した目録について忌憚のない批判や苦情を寄せる手紙を送った。この集成は現在活字で読むことが可能で<sup>20)</sup>、1599年12月24日付から没年月の1613年1月3日付に及ぶ計231通は興味津々たる史料である。ここで一学位論文に従ってその何箇所かを抜粋してみる<sup>21)</sup>。文中のラテン語とフランス語は書名である。

- ① *Smithus de Pronunciat. Ling. Græ. &c.*は、*Picardas de Prisca Celtopædia* と合綴されているが、S の位置に *Smithus* がなく P の位置にのみあるため（中略）、彼の著作は購入されていないものとみなされてしまう（*I take him as unbought*）。（1601年8月26日付）
- ② *Magia naturalis* が最善で最新の版かどうか疑問である。（1601年6月4日付）
- ③ *Menochius* の著作のどれが不必要でどれが欠けているのか、どうか私にメモを送ってほしい。（1601年7月22日付）
- ④ 我々は *Chalcondylas de origine et reb. gestis Turc.*を所蔵しているが、それが業者から私に提示されたフランス語の *De la Decadence de l'Empire Grec et établissement de Celuy des Turcs* と同一かどうか分からない。（1602年12月29日付）
- ⑤ *Cacherani Iurisc. Consilia* が、彼 [著者] の *Decisiones Senatus Pedemontani* と同一かどうか、できることなら喜んで知りたい（*I would faine [sic] know*）。（同上便）

これらのうち、筆者は、①の指摘により当該図書の2番目の体現形の記録が、1605年版中に次のように最初の体現形の記録と独立に掲載されていることを確認できた（字形は必ずしも忠実に引用していない）。

*J. Picard. de prisca Celtopæd. 1556. 4°.P.8. (372 ページ)*

*Tho. Smithus de recta linguæ Gr.& Anglicæ pronunciat. Lnt. 1568. in 4°.P.8.(392 ページ)*

さて、上記学位論文の筆者は、これらの箇所からボドリーが目録に求めた要件を次の3点に帰納した。

- (1) 記入は最小限ほかのものと物理的に綴じられているかどうかと無関係に、すべての図書に対して作成しなければならない。その結果、合綴された冊子の2番目以降へのアクセスが生まれる。
- (2) 各版は十分詳細に記述しなければならない。その結果、同一著作のほかの版と識別できる。
- (3) 1 著者の全著作 [の書誌レコード] は、1 箇所に排列すべきである (*should be listed*)。

[そのためには、] その著者の名前の一つの形を使用して満たす必要があり、[その結果]、図書館がその著者の著作をすべて所蔵するか否かを、利用者が判断する状態が生まれる<sup>22)</sup>。

しかしながら、これらだけでは明らかに前掲の④と⑤をカバーできていない。第4点として、この論者の語り口を借りるならば、次のように追加すべきだろう。「1 著作の書誌レコードは、1 箇所に排列すべきである。そのためには、その著作の書名の一つの形を使用して満たす必要があり、その結果、図書館がその著作の版をすべて所蔵するか否かを、利用者が判断する状態が生じる。」ボドリーが目録に求めた以上の要件を通覧すると極めて網羅的であって、現代の目録でも不完全にしか対応できていない。

ちなみに、ボドリーの書簡集は他にも臨場感溢れる文章を含んでいる。例えば事前調査にもかかわらず重複図書を購入してしまったときは、売却して収入を合綴の費用に当てる、それは鎖付図書を減らして鎖を取り付ける費用を節約するためである、といった類いである<sup>23)</sup>。

### 3.2 1605 年版における分出機能と集中機能

1605 年版<sup>24-25)</sup>の本文はその前年 10 月にいったんは確定した<sup>26)</sup>。だがボドリーは直ちには印刷へ移行させず、新着図書の記入をできるだけ多く盛り込もうとした。確定させた途端に古び始める冊子目録の宿命への抵抗であり、これは何も彼に限らずこの形態の目録を編纂する者に共通の心理である。だが、ほかに分出記入の挿入を指示した言行も刊行を遅延させた原因であると推測される。彼も当初は分出記入の作成を考慮していなかったようだが、関係者間での半年に及ぶ議論が作成の方向で決着してからは<sup>27-28)</sup>それを推進した。例えば彼の 1604 年 10 月 31 日付と続く 11 月 6 日付の書簡で、合綴された *Victorius in Phalerum* という部分と *Ethickes* という部分を別個の記入とするよう指示している（ただし筆者はこれらの記入を 1605 年版中にまだ見出せないでいる）。

刊行延期の後に編成された補遺 (*appendix*) の中身の大半は、おそらく新着図書の記入と作成漏れの分出記入のはずであり、本文 425 ページに対して補遺が 229 ページと全体の三分の一以上をも占める不均衡な姿は、ボドリー達の苦闘の表れである。本文中の分出記入には段落記号 (¶ 例は後掲) が冠されているが（ただし特定の判型の図書ではアステリスク (\*) が優先する）、これが 37 記入も連続する箇所がある。分出記入に対する熱意がうかがえる。他方、前出のボドリーの④と⑤の疑問に答えられる目録を実現するには、統一タイトルか少なくとも相互参照が必要であるが、筆者が通覧する限り統一タイトルは存在しないようであり、参照についてはそれを確認することが筆者にはできなかった。

ここで諸文献<sup>29-31)</sup>における言及を総合して、本版の個人著者名等に関する方針を一覧する。

- ・ 標題紙の表示を忠実に転記するのではなく、著者やタイトルはラテン語文法に従って記録されている。
- ・ 名の最重要部分は、イタリック体で記録され多くの場合は属格だが、文法の要求により他の格のこともある。

Nic. *Copernici Revolutiones Bas.* 1566. (298 ページ)

ボドリーはある書簡でジェームズ宛に、あなたは *Thesaurus dictionum Iuris &c. autore P. Cornelio Brederodio* と記すが、自分ならば *Brederodij Thesaurus &c.* と記すと書き送っている<sup>32)</sup>。後者は明らかに一部を省略した形だが、いずれにせよ、ジェームズのタイトル＋著者名（奪格）の順に対し、ボドリーは著者名（属格）＋タイトルを提案し、ジェームズは渋々これに従ったという<sup>33)</sup>。あるいは RDA の著作に対する典拠形アクセス・ポイントの、著者名＋タイトル形の源泉は、このあたりにあるのだろうか。

- ・姓と名は倒置していない。
- ・貴族の名は称号ではなく家族名を選択した。
- ・名（forename）と地名から派生した語から成る人名について、著者索引では後者の位置に排列した。ただし一貫していない。
- ・無著者名図書は通常はタイトルの初語の下に記入し、多くの場合、団体名等キーワードを避けている。ただし例外がある。（最も目立つ語か初語の下に記入と見る論者もいる。）
- ・著者名が筆名、または名（forename）もしくはイニシャルだけの本名の場合は、無著者名図書とみなす。
- ・手稿は印刷図書として処理されているが、無著者名の場合は、Anon という語が使用されている。ただし例外がある。

¶ *Anon. cui Pr. B. Dion. MS. Q.A.15.12.* (10 ページ)

- ・出版年と出版地を記録するが、版次と出版者は記録しない。
- ・大きさは一般にフォリオとみなし、4° と 8° が記録されている。
- ・Q (quaere) で始まる参照を多数付加している（例は前掲）。

我々にとって名前のみ知られているボドリーが、目録の細部にまで立ち入っていたとは大きな驚きである。彼は単に大学図書館史上の人であったばかりでなく、目録史上でもその名を逸することのできない存在だったのである。余事ながら没年はシェイクスピアのそれとわずか 3 年違いである。なお、1605 年版がヨーロッパの図書館で最初に印刷された一般目録（general catalog）とするのは<sup>34)</sup>正しくない。オランダのライデン大学図書館が先駆けて 1595 年に刊行している<sup>35)</sup>。

#### 4. 終りに

図書館再興の主導者で年齢が一世代近くも年長のボドリーによる指摘とあっては、唯々諾々と草稿を修正し「書架目録を基盤とした分類目録<sup>36)</sup>」を編纂するしかなかったと思われるジェームズであるが、旧来の目録の、教科別（神学・医学・法学・諸芸）構成に懐疑的

でなかったボドリーと異なって、彼はそれを嫌い<sup>37)</sup>また分出記入を重視しなかったともいわれる<sup>38)</sup>。この2点のうち前者については、彼が1605年版に著者索引を付し(64ページ)、ボドリー最晩年の1612-1613年に手稿の著者目録を編纂した後<sup>39)</sup>、遂に1620年版を晴れて著者目録として刊行し<sup>40)</sup>、書架目録やそれに基づく分類目録からの跳躍を果した履歴から明らかである。後者については、筆者は確実な根拠を見出すことはできなかった。

ちなみに、3.1に挙げた1605年版中の実例は、1620年版で次のように形を変えて現れる。

Io. *Picardus* Tontrerianus

De prisca Celtopæd. 1556. 4°.P8. (388ページ)

Tho. *Smithus*

De recta linguæ Gr. pronunciatione.

*Lnt.* 1568. 4°.P8. (463ページ)

小論は分類目録と著者目録の比較を範囲外とするが、ここではジェームズが1620年版だけでなく、哲学、音楽など17もの分野に及ぶ主題目録を学内向けに作成したことを一言しておきたい<sup>41)</sup>。著者目録一辺倒ではなかったのである。彼の構想ではこれらは1620年版への分類索引という位置付けだったのであろうか。分類目録か著者目録かの論争は、パニッツイの時代に再燃することとなる<sup>42)</sup>。

ところで、著者目録の生命はいうまでもなく著者名の典拠コントロールにあるが、1620年版では必ずしも徹底されず、例えばトマス・アクイナスやドゥンス・スコトゥスの著作が複数箇所に掲載され、それらの間の相互参照も不十分であるという<sup>43)</sup>。他方、筆者の目には統一タイトルとおぼしきものが見て取れる。ただし、この点に言及した文献はないので早合点かも知れず、1620年版および後続の1674版等における集中機能の方針や実態の分析は、次回のテーマとする。

さて、分出機能の発揮に力を注いだ目録の先駆けが、小論で扱った2種の目録に限られる、とは筆者は全く思っていない。探索すればまだまだ貴重な企てが潜んでいるに相違ない。だが、筆者はひとまず過去への旅を諦め、次回以後は現代へ向かって歩み始めたい。

注

1) 澁川雅俊『目録の歴史』1985 vii,212p.

2) 永嶺重敏「中世の総合目録とフランシスコ会—*Registrum* と *Catalogus*—」『図書館界』33(5)1982 201-209p.

3) 永嶺重敏「中世ソルボンヌ図書館成立史に関する一考察—利用の観点から—」『図書館界』34(4)1982 268-276p.

4) この主張を記したものの一部に次のものがある。

- 「構成部分の記述：将来の目録」『整理技術研究集録』1 1993 5-12p.  
 <<http://josoken.digick.jp/pub/shuroku1hurukawa.pdf>>
- 「目録の構造に関する試論」『資料組織化研究』44 2001 1-10p.  
 「統一タイトル論への序章」『資料組織化研究』50 2005 1-9p.
- 5) 古川肇「構成部分の明示に関する実践」『資料組織化研究』51 2005 p.5.
- 6) 概要については次を参照。  
 和中幹雄「FRBR-LRM (FRBR、FRAD、FRSAD の統合案) の概要メモ」『資料組織化研究-e』69 2016 27-41p. <<http://techser.info/wp-content/uploads/2016/10/69-20161027-3-pb.pdf>>
- 7) 今から振り返れば下記の拙論は、この種の試みの一つだった。  
 「ゴーマンと『英米目録規則』—ゴーマンの標目論とその影響—」『整理技術研究集録』2 2000 3-14p.  
 <<http://josoken.digick.jp/pub/shuroku2hurukawa.pdf>>
- 8) 前掲1) p.74.
- 9) Norris, Dorothy May. *A History of Cataloguing and Cataloguing Methods, 1100-1850*. 1939. p.52-54.
- 10) ボドリ—図書館所蔵 (MS 920)。
- 11) 前掲1) p.74-83.
- 12) 前掲1) p.77.
- 13) Clark, John W. *The care of books*. 1901[reprint 1997]. p.188-190.
- 14) Strout, Ruth French. "The Development of the Catalog and Cataloging Codes," *The Library Quarterly* 26, 4(1956): 261. <[http://polaris.gseis.ucla.edu/gleazer/296\\_readings/Strout.pdf](http://polaris.gseis.ucla.edu/gleazer/296_readings/Strout.pdf)>
- 15) 浪江虔「開架式では背文字が第一」『図書館雑誌』66(10) 1972 492-494p.
- 16) 浪江虔「満腔の賛意と若干の批判」『図書館雑誌』58(6) 1964 p. 270
- 17) Ranz, Jim. *The Printed Book Catalogue in American Libraries, 1723-1900*. 1964. p.2.
- 18) 前掲1) p.123-127.
- 19) 雪嶋宏一「17世紀英国における図書館の革新」『図書館文化史研究』29 2012 p.62
- 20) *Letters of Sir Thomas Bodley to Thomas James, First Keeper of The Bodleian Library*. ed. with an introduction by G. W. Wheeler. 1926. 251p.
- 21) Freedman, Maurice J. *The Functions of the Catalog and the Main Entry as Found in the Work of Panizzi, Jewett, Cutter, and Lubetzky*. Ann Arbor: UMI, 2002. [1983年提出] p.25-26.
- 22) 前掲21) p.27
- 23) 前掲20) 1601年7月22日付、1602年3月31日付、1603年6月24日付。
- 24) *Catalogus librorum bibliothecae publicæ quam vir ornatissimus Thomas Bodleius eques auratus in Academia Oxoniensi nuper instituit*. 1605. 655, [64] p.
- 25) *First Printed Catalogue of The Bodleian Library, 1605: A Facsimile*. 1986. xvi, 655, [64] p.
- 26) 前掲9) p.146
- 27) 前掲20) 1604年4月18日付注。
- 28) Philip, Ian. *The Bodleian Library in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. 1983. p.13.



- 29)前掲25) p.xiv-xv.
- 30)前掲9) p.145.
- 31)前掲14) p.265.
- 32)前掲20) 1601年8月26日付。
- 33)前掲28) p.12.
- 34)前掲9) p.147.
- 35) *Encyclopedia of Library History*; ed. by Wayne A. Wiegand and Donald G. Davis, Jr. 2013. p.108.
- 36)前掲1) p.128.
- 37)前掲9) p.144.
- 38)前掲14) p.265.
- 39)前掲1) p.124.
- 40) *Catalogus universalis librorum in bibliotheca Bodleiana*. 1620. xxiii, 539, 36p.  
<[https://books.google.co.jp/books?id=sGw\\_tH1uAHkC&pg=PA293&lpg=PA293&dq=catalogus+universalis+librorum+in+bibliotheca+bodleiana&source=bl&ots=zIFpsdfXUm&sig=ENoSBgYgDU013k35MyuCFxS5mrE&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwjF4-eelNjQAhXEerwKHXqMC38Q6AEIjAB#v=onepage&q=catalogus%20universalis%20librorum%20in%20bibliotheca%20bodleiana&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=sGw_tH1uAHkC&pg=PA293&lpg=PA293&dq=catalogus+universalis+librorum+in+bibliotheca+bodleiana&source=bl&ots=zIFpsdfXUm&sig=ENoSBgYgDU013k35MyuCFxS5mrE&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwjF4-eelNjQAhXEerwKHXqMC38Q6AEIjAB#v=onepage&q=catalogus%20universalis%20librorum%20in%20bibliotheca%20bodleiana&f=false)>
- 41)前掲9) p.149.
- 42)熊田淳美、安江明夫「パニッツィとブリティッシュ・ミュージアム図書館一蔵書目録刊行中止とその背景をめぐって」『参考書誌研究』7 1973 p.26-30.
- 43)Rijk, E. de. "Thomas Hyde, Julia Pettee and the Development of Cataloging Principles; with a Translation of Hyde's 1674 Preface to the Reader," *Cataloging & Classification Quarterly* 14, 2(1992): 44.

(ふるかわ はじめ)  
(2017年3月19日受付)  
(2017年3月31日受理)